

## ブタと貨幣

コンサルタントInfo Box 津田謙二

### ブタは財産

世界の各地で、文化的な横のつながりがないままに、各民族の間で併行してというか自然発生的に進行したブタの飼育、すなわちイノシシの家畜化は、その雑食性……ここが人類に似ている……からくる飼いやささ、肉が柔らかく美味であること、さらに繁殖力の強さともあいまって、熱帯、亜熱帯から広葉樹林地帯の定住民族の間に急激に広まっていったと考えられる。

その証拠というか、肥満体形のブタ、垂れ耳のブタなどがかなり古代に出現している。そして貨幣が出現する以前には、ブタは物々交換やいけにえのための貴重な財産、財貨とみなされていたことは想像に難くない。つまりブタの所有、それが即“富”を意味していたと考えられる。

1999年のはじめ、江戸東京博物館で開催された“大黄河文明展”には「金縷玉衣」を着たミイラが展示されていたが、この主は2000年前の中国は漢代の梁という国の王である。その手には玉（ぎょく）にブタを彫刻した「玉豚」をしっかりと握りしめていた。当時ブタは富と権力の象徴だったのである。

考えてみれば、原始時代は誰が見てもそれとわかる資産は家畜だった。装飾品、さらに宝石とか豪華な衣類が出現するのは後の時代になってからと考えてよいのではないか。

このようなことから、ブタ泥棒は財産への侵害であり大きな罪と考えられても不思議ではない。

現在、パリのルーブル博物館にある有名な楔形文字を石板に彫った法典……バビロニアの王、ハンムラビ（BC1728～1686年頃）……には家畜の盗人に対する刑罰を以下のように決めている。

“牛かブタを盗んだ者は、それは神か神殿の所有であるならば30倍にして返すべし。もしもムシュケタ（奴隷を所有はするが自由民より下の階層）の財産ならば10倍にして返すべし。もしも盗人が返すべきものを持たぬならば命で償うべし……”

つまり返せぬ者は死刑なのである。ブタはまさしく財産視されていたのである。

こうして経済的価値を有すると見られたブタは当然のように商品または商品との交換物として使われる。今でもパプア・ニューギニア高地のメルバ族は、贈り物の儀式にブタか貝（アコヤガイ）



「動物大百科」10. 家畜. 1987年 平凡社より  
パプアニューギニア、高地、メルバ族での贈り物の儀式

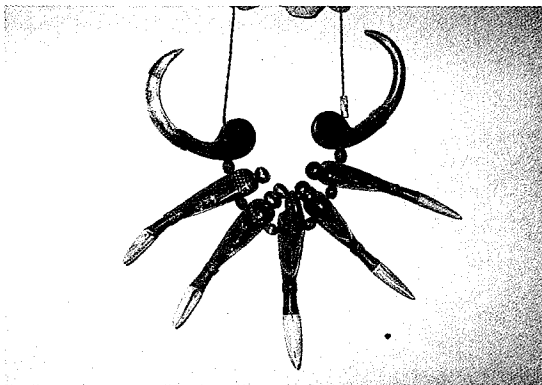
の殻、貨幣とともに交換されるし、その昔はフランスのセヴェンヌ地方では、婚約のとき花嫁の持参金の価値を決めるのにブタが使われた。最もポピュラーで、価値のわかりやすい財産であったと言えるのではない。

今でもブタを最も重要な家畜としているアジア、太平洋諸島の中のニューヘブリデス諸島（フィジーとニューカレドニアの間の島々）では20世紀の初めまでは妻を求める時は年齢などによってブタを5頭から25頭までの価値の差があったとされている。

またこの地域では雄ブタの牙が一種の通貨として用いられ、以前は雄ブタの歯1本がイヌの歯200本の価値があり、イヌの歯1本は3～5ペニヒの価値ありとされていたという。

なおこの地域では牙となる雄ブタの犬歯に特に価値があり、これが半月形に伸びるにつれて価値が上昇していく。筆者の所蔵する（コーヒーの産地で有名なトラジャ付近で入手してきてくれたもの）首飾りもまさにこれで、念のために波岡茂郎先生にお見せしたところ、間違いなくブタの牙にあたる歯ですとおっしゃった。

ところで中国と並んでブタ飼育の歴史の長いヨー



牙の根元には人の顔が彫ってある

ロッパでもブタは当然のこととして財産視されていた。このあたりの事情に関してはH・D・ダネンベルク著「ブタ礼讃」（1990年刊。日本語訳は福井康雄氏による、1995年博品社刊）にかなり詳しく述べられている。

ヨーロッパといえば飛行機の上から見下ろしても痛感させられるのは森林、それも主として広葉樹林に覆われた大地であったという点である。森林を背景に生まれた文明、文化であるとも言える。牧場や畑は皆この森を開墾してつくられたものだ。そしてこの広葉樹林こそがブタのルーツ、イノシシの生存に最も適した地域なのである。だからヨーロッパでのブタの飼育の多くは森林で行われた。

そこでH・D・ダネンベルクはその著書「ブタ礼讃」で次のように述べている。

“中世では森というものは良い材木をどれだけ生産できるかでなく、そこでブタがどれだけ餌を……とりわけドングリを……見つけることができるかによって評価されていた。”

つまり土地の、森林の評価基準がブタをもとにして決められていたのである。

当然のこととして、財産視されたブタを盗むことについての刑罰も定められていた。

“8世紀中頃に成立した法律……実質的にはおそらく6世紀からあった……でカール大帝のもとで802年に訳されたサリカ法典には、ブタを盗んだときの罰金が定められている……”として9項目にもわたる各種の場合、すなわちブタの乳児、子ブタ、雌ブタから1歳ブタ、2歳ブタ……等それぞれの場合の罰金の額が詳しく決められている。

さらにこの本には、“11世紀の半ばに、コルヴァイ大修道院は、毎年1100頭を超えるブタ（ブタ税）を受け取っていた。そのため臣下の農民は修道院

の森でブタの番をしなければならなかった。”、とか“肥育飼料のオークのドングリやブナのドングリは、中世では成文化された権利（ブタ法）であることも多かった。”と述べ、ブタが主として森で飼われていたこと、そしてブタが一種の通貨として課税の対象になっていたことを示している。

### 貨幣に登場

こうしたブタの財産としての価値を考えると、貨幣のデザインの中にもブタが登場するのは当然と言えるかもしれない。

筆者は早速図書館に行って貨幣に関する図書を調べたが、なにぶんにも貨幣のデザインは数多く、多く見られるのは人物像で、動物では権威の象徴としてのライオン、ワシが多く、他には雄ウシ、それにウマ、フクロウなどが示されているだけで、身近な家畜は本の中では登場していない。さらに大きな図書館で詳しく調べれば、動物のデザインされた貨幣といった本が見つかるかもしれない。とはいえ、ブタはやはり動物としては身近すぎるのかとも思う。貨幣のコレクションでは大英博物館、HSBCマネギャラリーが1997年に開館していると聞いているので、機会があれば調べに行きたいと思っている。

だが、流石というか、家畜の、ブタの研究者はブタの貨幣について注目し、よく調べておられるのには感心させられる。

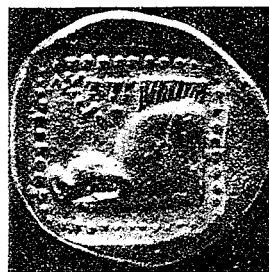
F・E・ゾイナー著「家畜の歴史」（1962年、日本語訳は国分直一・木村伸義訳、1983年法政大学出版局）には、そのいくつかが図示されている。ブタに関してはBC 5～4世紀のクレタ島の2ドラクロマ銀貨に始まり、タテガミを有する姿ながらすでに家畜化が進んで足が短くなったものから、

ロンドンの造幣局の青銅貨までが紹介されていて楽しい。なおこの本には他の家畜のコインも多く紹介されている。ヤギ、ヒツジ、ウシ（インド）、ゾウ、ウマ、ラクダ、ロバ、ネコ、チータ、ニワトリ等……考えてみれば、紙や布のなかった昔の家畜の姿を知るには、洞穴の壁画や陶器、それに比較的良い状態で保存されやすいコインによるしかなかったのではなからうか。

新しい本では、先に述べたH・D・ダネンベルクの「ブタ礼讃」にも著者の所蔵するコインのいくつかを示されている。この中で興味深いのは、1921年に発行されたエーレンフリーデドルフの50ペニヒ紙幣である。これはその地域が後に繁栄する根源となった鉱山、その鉱石を発見してくれたのがイノシシとの故事によるもので、穴掘り、土掘りの習性のあるイノシシの生態がその地の富をもたらしたものとしての記念に紙幣に登場した例である。

### 日本でもイノシシが……

ところで明治時代まで、沖縄と本土の一部を除いてブタの飼養がなされなかった日本で、イノシシの図柄がある紙幣のあることを知った。ブタに関わる文献を片端から眼を通すうちに、五十嵐謙吉著「十二支の動物たち」（1998年、八坂書房）



クレタ島銀貨



ロンドン造幣局 青銅貨



エーレンフリーデルドルフ 50ペニヒ紙幣

の中に、明治時代に発行された当時としては大金であった10円札にイノシシの図柄が登場していると述べられていて、そのうち1枚の写真が紹介されている。

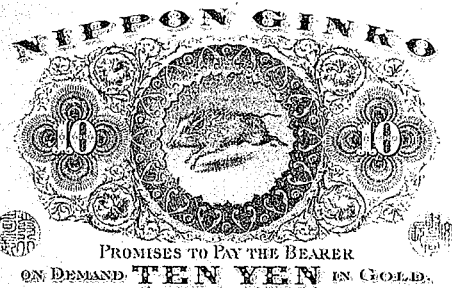
イノシシの図柄の10円札は2種類あって、いずれも表の右側に和氣清麻呂公の肖像がある。明治23年発行のものは、表面の上下に小さい8頭のイノシシが描かれていて、貨幣マニアの間では表猪の名で知られているもの。ついで明治32年に発行されたものは表面右に清麻呂公の図が、左には清麻呂公を祀る護王神社の図が配され、裏面中心に大きく疾走するイノシシがある。通称裏猪の紙幣である。

和氣清麻呂公とイノシシの関係については「十二支の動物たち」によると、その昔権勢をふるって天皇になろうとした僧、道鏡の野望を称徳天皇にやめさせ、そのために九州に流罪とされた清麻呂公が大分に向かう途中、道鏡が配下の者に清麻呂公を襲わせて亡き者としようとして危険が迫ったとき一天にわかにかき曇り、大雷雨とともに一群のイノシシが出現して清麻呂公を守護したとの故事による。

なお、裏猪の札の表にある護王神社は、和氣清麻呂公とその妹広虫（ひろむし）を祭神とするも



明治三十三年製



10円札(明治32年)

ので、京都市上京区にあると記されていたので、早速電話帳で調べて詳しい位置を聞き訪問した。まず入ると神社の左右に坐っているのは狛犬ならぬイノシシ。流石である。パンフレットをもらい、お守り（ここにミニ10円札がついている）を買う。4月4日の例祭は通称イノシシ祭りと言われて多くの参詣者を集めるとあり、何ともうれしくて境内を歩き、イノシシの画などにカメラを向けたりして楽しいひとときを過ごした。

場所は京都市の中心、上京区は烏丸通り下長者町。京都御所の蛤御門の前にあたる。同志社大学の南の御所も散策には良い場所でもあるので、ブタ好きの皆さん、機会があれば訪ねられてはいかかと思う。